

零一

強い日差しの中、銀の髪がその光を反射している。この船の上で金の髪は珍しくないが、その中でもより一層、存在ごと光り輝いているような男が居た。皆長い船旅を終え、その巨大な船から下りていく。彼も列に加わり、そして港へと下り立った。

「バイルシュミット先生、ようこそ日本へ」

聞いていた通りの容姿なので迷わず男の元へ走り寄り、声を掛ける。

彼は口元を歪めて笑った。

「学生か？ 独逸語は学校で習ったのか」

「はい、そうです。発音は、大丈夫でしょうか」

彼は瞬きしてこちらを見おろした。彼は自分より背が頭一つ分高い。

「Aussprache」

発音という言葉を訂正するように彼は言った。レッスンのように言葉を真似して繰り返すと、彼は笑って頭をくしゃくしゃと撫でた。その手は大きい。

「よし、良いんじゃないか」

整った顔立ちを崩して笑うと、途端に親しみやすくなる。

お荷物を、と手を差し出したが、彼はそれを断ってさつきと歩き出してしまった。

「相変わらず暑いな」

「先生は日本にいらっしやった事があるんですか？」

背が高く、足も長い為に、彼は普通に歩いていても自分より随分早い。置いて行かれまいと小走りに後を着いていく。

「おまえは何も聞いていないのか？」

「はい、私はただ先生をお迎えして身の回りの世話をするようにと頼まれただけですから」

彼は暫く口元を押さえていたが、堪えきれないといった風に声を上げて笑った。

「それは、本田菊に？」

「え、はい。本田先生に」

突然自分の独逸語教師の名を呼ばれて驚いた。きっと彼らは個人的に面識があるのだろう。

「あいつ、自分で来れば良いのに」

彼が悪態を吐くような調子で言うので、慌てて庇うように「いえ」と言った。

「本田先生はお忙しい方ですから。授業の無いときはすっかり家に籠もって翻訳の作業をされています」

「前にもしてなかったか？」

「ええ、もう何冊目かになると思います」

彼は唸り声を上げて目を据わらせる。そうするとまるで睨み付けるような凶悪な顔立ちになった。自分は何か怒らせるような事を言っただろうかかと焦ったが、彼はふと思いついた

ように口を開いた。

「相変わらず煙草ばかり吸っているか？」

「本田先生ですか？ さあ、どうでしょう？ 私は見た事はありませんけど……本田先生とはどういう知り合いなんですか？」

すると途端に彼は口元を大きく開いてにやりと笑う。

「独逸語の先生だった」

一

先生に会ったのは一年から二年へと進級する丁度その境目の頃だった。先生は寮の入り口で借りてきた猫のように首を縮めて居た。手に持った鞆はいかにも重そうで、俺はつい気の毒になった。見れば入り口近くの一室で委員会の面々が顔を突き合わせて難しい顔で居る。

「あれは新入生か？ 入寮日を間違えたのか？」

様子を伺っていた一人を捕まえて聞いてみると、彼は心底おかしように笑い出した。

「君、あれが新入生という面構えか？ 自分が老け顔だからついでいくらなんでも」

失礼な事に笑い出したまま痙攣し始めたので、仕方なくその隣に居た男の腕を引いた。

「新しい独逸語の教授だ。どうやら手配していた下宿に手違

いがあつたらしくて、一晚泊めて欲しいんだそうだ」

男の声は大きく、恐らく玄関に突っ立ったままの先生にも聞こえたのだろう、困ったような顔になった。

「泊めてやりやいいじゃねえか」

「いや、今度教授になると言っても、今は部外者だ。部外者をこの寄宿寮へ入れるわけには」

男の声がさらに大きくなる。何か反論してやろうと口を開こうとしたその前に、玄関から「あのおう」と聞こえた。落ちていた低い声は、確かに若者とは言いがたい。

「私、この寮の卒業生ですが、それでもいいじゃないか」

入り口近くの部屋から議論する声が途絶えた。静まりかえる中、自治委員はぼかんと口を開けて教授を見る。それからお互い目配せすると、それならばと言って先生を寮内へと招き入れた。都合の良いことに新入生はまだ居らず、三年生ももう皆出て行つた。留年した者は残っているが、それでも空き部屋はいくつもある。

「バイルシユミット君、案内を頼む」

自治委員の一人が言う。泊めてやればいいと簡単に言つた事が癪に触つたのだろう。特に断る理由もない為、頷いて教授に向き直つた。

「鞆、持ちましょう」

「いえ、結構です」

先生は目を見開いてこちらを見ている。初対面での視線